

Title	チユルゴオ著Réflexionsの英訳に就いて
Sub Title	
Author	常松, 三郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.4 (1922. 4) ,p.516(84)- 525(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220401-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— op. cit., pp. 269-272 (未完)

きて真なるが如く思はる。然れども其が真なるが如く思はるゝは、此法則が資本に付きて真なるが故なり。即此法則が斯く眞實なるは true quantity に變化され得る場合に於てのみなり。

資本の額を増加することなくして生産期間を延長せば此法則は適用されざるなり。

生産期間は、最初の原料品が用具製造の爲に準備せらるゝ時より、其用具が生産上用を爲さるに至る時を以て、測るを得べし。文明の始源まで遡り得る既往の用具は、現在の目的の爲には之を無視するを得べし。其れ等は總ての資本財に一樣なる量 (quantity) を示すものたるなり。又現在のものに從つて來るべき他の連續せる用具も無視するを得べきなり。されば其生産期間の始りは勞働及資本が材料を以て其用具を形造り始めし點にして、其終りは其が全く他の財を生産するを止むるに至りし時なり。」(Clark, distribution des Richesses の翻譯を企つるに當りて吾人は L. Robineau の編輯による Turgot: Administration et oeuvres économiques の Réflexions を W. Ashley の英譯たる Reflections を比較するの機會を得たり。吾人は茲に此の兩書を比較することによりて、何故に Ashley が

(一) Réflexions の執筆年の一七六六年末たることを認めし (Ashley, ibid, p. viii) その開扉に「一七七〇年」なる年代を附せしや。又何故に(二)第七四節 “True foundation of the interest of money” の次ぎに “Reply to an objection” なる獨立の節を設くることによりて全篇を百一節を爲せしや。に就き吾人の未熟なる研究の結果を述べんとす。

Turgot が Réflexions 執筆せし動機はその當時支那より佛蘭西に留學し居りたる支那の二書

チユルゴオ著 Réflexions の英譯に就いて

常松 三郎

本篇は拙稿「“Réflexions” の研究」の第三編「Réflexions の邦譯」の緒言をして草せられたるものなり。而して吾人の “Réflexions” を邦譯するに當りて底本したる所のもの Petite Bibliothèque Economique Française et Étrangère (佛國及び外國經濟學小叢書) 中 L. Robineau の編輯に係る “Turgot: Administration et oeuvres économiques” の Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses について W. Ashley 編纂の Economic Classics 中の Turgot: Reflections on the Formation and the Distribution of the Riches を参照せり。吾人が以上の二書を比較せし結果相互相異なる點を發見して簡単に之を指摘せんとして作れるものを本稿を爲すなり。

Turgot, Réflexions sur la formation et la

年即ち高及び楊二氏の歸國に際して與へんが爲めなり」といふ Turgot の尺牘によるも明らかなり。即ち Turgot が一七六六年十二月九日 Dupont de Nemours に贈る手紙に於て (Ashley, Economic Classics, Turgot, Appendix, Excerpt 6 pp. 110-111) 或は Turgot が一七七〇年十一月十二日 Josias Tucker に送る手紙に於て (Oeuvres de Turgot, Ed. Guillaumin, Tome ii, p. 802) 或は更に Turgot が一七七四年五月三日 Caillard と與へし書簡に於て (Turgot, administration et oeuvres économiques, par Robineau, p. 119) に於ては「五月三日附」なるも Oeuvres de Turgot, Ed. Guillaumin, Tome ii, pp. 832-833 に於ては「五月五日附」なり。今前者に據りて「五月三日附」と爲す。その動機を語れるなり。Dupont du Nemours の意を致しし Oeuvres de Turgot の編輯者たる Eugène Daire も亦此事

を脚註す。(Questions sur la Chine, dans Oeuvres de Turgot, Ed. Guillaumin, Tome i, p. 311 李永霖氏「Turgot の支那の二青年」國民經濟雜誌第一九卷第五、六兩號、同第三〇卷第三號並びに同氏「高及び楊に關する考證」三田學會雜誌第一六卷第一號参照) 洵に Turgot は公表の目的を以て Réflexions の稿を起せるものにあらざり。雖も Dupont de Nemours の切なる勸誘に従ひ École physiocratique の機關雜誌たる Ephémérides du Citoyen の一七六九年十一月、同十二月並びに一七七〇年一月の各號に連載公表する事を諾せるなり。而して是等各號が世に公にせられたるは一七七〇年一月二月及び四月なりしなり。

然かも Dupont de Nemours の Ephémérides に Réflexions を掲載するに當りて之を完全に École physiocratique の學說を一致せしめんが爲

八年初版本の再版公にせられしも是亦初版本と等しく稀觀書に屬するなり。

然らば Robineau は如何なる根據よりしてこの Réflexions を以て Turgot の "texte exact" なりと爲すや。Robineau の言ふ所によれば彼は G. Schelle と相協力して Réflexions の原本の探索に従事し、斯くして得たる原本の内容とその探索の經過とは、一八八八年七月の Journal des Economistes 紙上に Schelle の名によつて發表せられたるなり。而して Robineau は實にこの原本を取りて直ちに Petite Bibliothèque Economique の一卷に收めたるなり。(Robineau, ibid, p. 46) 吾人は今 Journal des Economistes に投稿せられたる Schelle の論文を手にすること能はざれば、果してその Turgot の一七七六年の訂正版と同一なりや否やを論證し能はざるの遺憾を感するなり。

もに單に文句の改竄補筆のみならず節次の變更をも敢てし(之れに就いては Turgot, par Robineau, p.p. 60, 62-65, 95. 119-122. Oeuvres de Turgot, Ed. Guillaumin Tome i, p.p. 15. 17-47. Reflections, tr. by Ashley. p.p. viii-ix 参照) Turgot の不満を招き、遂に Turgot 自ら一七七〇年二月二日、同月二十日、同月六日、同年三月七日、同月二十三日附の各書簡によりて難詰を受むた。 (Schelle: Du Pont de Nemours et l'École physiocratique, 1888. p.p. 127-129. Reflections, tr. by Ashley Appendix Excerpts 7, 8, 9. P.p. 111-112) 然るに Turgot は一七七六年に至りて Ephémérides に掲載せられたる Réflexions を自ら正誤し翻刻したりと雖も、その部數は Schelle の考證する所に依れば僅かに百部乃至百五十部に過ぎずして、今日その一部をへ殘存すること無し。而して更に Turgot の死後一七八

然らば Ashley の英譯版は如何。彼は始め McCulloch の監修に係る A Select Collection of Scarce and Valuable Economical Tracts, 1859 中の Reflections をその儘直に Economic Classics の一卷と爲さんとするの意思有りしと雖もその英譯の龍頭蛇尾且つ孟浪杜撰なるに失望し、依つて Robineau の複刻並びに Seligman の好意によりて借用し得たる Ephémérides の Réflexions を底本として自ら英譯の筆を取るに至れるなり。(Ashley, ibid, p.p. x-xi)

吾人は茲に Robineau の複刻と Ashley の英譯本とに就いて比較論を試みんとす。
第一 何故に Ashley がその開扉に「一七七〇年」なる年代を記せしや。Réflexions が一七六六年末に執筆脱稿せられしことは通説として疑ふべからず。歐米經濟學者は固より我が國に於ても亦然り。(高橋教授も亦今年三月の雜誌

「改造」に於て此事を明記せらるゝ而して Turgot が Réflexions のことに始めて言及せし文書は實に一七六六年十二月九日附の Dupont de Nemours に與へし書簡なるの事實より考ふる時、毫くも Réflexions が脱稿せられて高及び楊の支那二青年に手交されしは一七六六年の下半年ならざるべからず。然かも上記の書簡に現はれたる文典上の「時」が現在完了によりて使用さるゝに於てをや。然るに茲に異とすべきは、Turgot と支那の二青年との關係に就き一兩年以前より多大の努力を以て研究に従事せる李永霖氏が、その蕩著を擧げて三田學會雜誌一月號に「高及び楊に關する考證」を發表しその中に於て「高氏並びに楊氏は印度會社の船 Chaiseul 號に乗船して將に印象深い佛蘭西を離れて懐しい故國に向つて旅立つたのは一七六五年の一月十六日である。……彼等は遂に一七六六年正月の末に故

郷である北京へ歸つたのである。(三田學會雜誌 第一六卷第一號一〇三頁)云々と記せる事はなり。會つては“Ko”、“Yang”なる異國字より「高」楊の母國字へ還元されたる李永霖氏のこの記述は吾人のその眞實たるべきことを希願するところなりと雖もその典據を明記せられざるは遺憾とせざるべからず。「フイッシュクラート學派の發生と隆興と而して其の末運とを具さに略た」(高橋教授の言を借用す) Dupont de Nemours の言ふ所によれば Réflexions には四種の版本ありてその初版は一七六六年なりと云ふ。(Oeuvres de Turgot. Ed. Guillaumin Tome i, Notice Historique sur Turgot, par Dupont de Nemours, p. XLV) 茲に謂ふものの四種の版本とは、即ち一七六六年末 Turgot が支那の二青年に與へし初版本、一七七〇年 Dupont de Nemours によつて Ephémérides に掲載せられたる

改竄版、一七七六年に Turgot によりて正誤せられし訂正本並びに一八〇八年 Dupont de Nemours によりて編輯せられし Oeuvres de Turgot 中の Réflexions (或は一七八八年 Turgot の死後訂正再版本を意味するや)の四版本なりと推定さるゝなり。故に「Réflexions」の「一七七〇年」の關係は Turgot にとりては最も嫌惡すべきものなり。蓋しこは全然 Turgot の眞意に反したる他人の改竄を世に傳ふるのみなるを以てなり。たゞ Réflexions が始めて世間に公表せられたる點に於てのみ怨むべきものなり。故に Ashley がその開扉に「一七七〇年」なる文字を記入せしは專斷と云はざるべからず。少くも Wealth of Nations 出版の年を以て Réflexions の出版年と爲すは尙は恕すべし所あり。吾人はこの一七六六年となすべしを至當となすものなり。

第二 次に何故に Ashley は Réflexions が百一節より成ると爲せしや。この點に關して毫くも一七六六年の初版本を尊重せしことに就いて吾人は賛意を表するに憚らず。蓋し Turgot が Dupont de Nemours に送付せし Réflexions が百一節より成りしことは次の事實によりて明白なり。即ち Turgot は一七六九年十二月某日に Dupont de Nemours に與へし書簡に於て

“Voici, mon cher Du Pont, le morceau sur la richesse que je vous ai promis; il n'est pas bon, mais il est long, quoique trop court. Il remplira beaucoup de papier et c'est ce qu'il nous faut. Il contient 101 paragraphes, nombre consacré, comme les 1001, pour ces sortes de choses...” (Du Pont de Nemours et l'École physiocratique, par Schelle 1888, p. 125) の如し、又 Turgot が一七六四年五月三日 Callard に

贈りし手紙に於て

“L'homme de lettres qui a le dessein de Traduire la Formation des richesses me fait plus d'honneur que je n'en mérite.... En ce cas, je le prierai de faire, dans le corps de l'ouvrage, un retranchement nécessaire et qui forme double emploi avec mon Mémoire sur l'usure. J'avais prié M. Dupont de le retrancher, mais il n'a pas voulu perdre trois pages d'impression. (Oeuvres de Turgot, Ed. Guillaumin. Tome 1, p. 833)

ツルクの Robineau 也

“Lorsque Turgot envoya à Du Pont de Nemours les “Réflexions” il avait mis à la suite du paragraphe 74 un paragraphe intitulé: Réponse à une objection.” (Robineau, ibid, p. 119. note)

容易に理解し得る。即ち Turgot の同日の書簡に

“Si le traducteur veut conserver ce paragraphe, il faut le mettre en note au bas des pages, avec un renvoi au dernier mot du paragr. 74, en retranchant le titre du paragr. 75.... Quant au morceau sur la versification allemande, il a réellement besoin de plusieurs changements considérables, et si votre ami persiste à me faire l'honneur de le traduire, il faut absolument que je fasse ces changements”

ツルクの Schelle 及び Robineau によりては “Reponse à une objection” を第七四節の脚註と爲し、獨逸譯本にありては之れを全然排除したるなり。然るに Ashley の英譯本にありては主として Robineau の版を底本としたることも

ツルク也。故に Turgot が支那の二青年並びに Dupont du Nemours に送りし Réflexions なるもの中の全篇百一より構成せられたりしものをいふからず。洵に第七四節たる Vrai fondement de l'intérêt de l'argent の次節に Reponse à une objection を獨立の節として採るを否し、或は百一節となり或は百節となるものなり。然らば吾人は孰れを認むべきか。Turgot が Du Pont de Nemours の Réflexions を送らたる後に於て “Reponse à une objection” を省略せしむるを彼に督促したるも Dupont de Nemours が之れを肯んぜざりしとて Turgot が Caillard に與て前掲一七七四年五月三日附の書簡によつても明らかなり。故に Turgot が自ら一七七六年 Réflexions を改訂し單行本として上梓したりし時の Reponse à une objection なる節を全然削除せしむるも右述の意思よりして

拘らず此點に於ては故に Réflexions の最初の版本を踏襲したるなり。故に Ashley の英譯本はその大體に於て後年の Réflexions に倚據しつゝ上記の點に於てのみ前年の Réflexions に準由せしむるに於て内容の統一を缺くもの多しと謂ふことを得べし。之れに反して Robineau の版は一七七六年の單行本を底本と爲したるなり。以上を以て吾人は Robineau の版を Ashley の英譯本の比較を終はれり。然れども尙ほ茲に Ashley の撰譯を自ら目し、彼が一七七〇年の Éphémérides du Citoyen に掲載せられたる Réflexions の一八〇八年 Dupont de Nemours によりて編輯せしむる Oeuvres de Turgot 中の掲げらるる Réflexions の一八四四年 Daire によりて爲せられたる Oeuvres de Turgot 中の Réflexions どの三者を全然同一物なりと爲して

“Strangest of all is the fact that when, in

1808, Du Pont edited Turgot's Oeuvres, he boldly reprinted his old text of the Ephémérides; this was copied by Daire in his edition of 1844." (Ashley, ibid, pp. ix-x)

吾人は Dupont du Nemours の編輯したる Oeuvres de Turgot を手にとりて能はず。雖も一七七四年五月三日 Turgot 及 Caillard とい興へし書簡に於て

“J'avais prié M. Dupont de le retrancher, mais il n'a pas voulu perdre trois pages d'impression”

と云ふ Robineau 也

“Ce paragraphe parut, comme on voit, dans les Ephémérides, mais fut supprimé dans l'edition que Du Pont donna en 1808 des oeuvres complètes de son ami.” (Robineau, ibid, p. 120)

Journal des Economistes の Schelle の論稿を手にすること能はざるを以て斷言するを得ず。又一七六六年の Réflexions と一七七六年の Réflexions との間に幾許の差異ありや、之れ亦不明の問題なり。洵に Ashley の言へるが如く今日に於て「Turgot の真正の字句に關して解答し能はざる幾多の不可解の疑問存するなり。」恐らく之れが眞の解決は Journal des Economistes 社と Guillaumin 社との關係を有する巴里在住の經濟學者のみ之を能くするものならん。

ウ井リアム・モリスの勞

働論 (二、完)

加 田 哲 一

四

人間の活動時と休息時とに希望と快樂を興ふ

節より成りしもの、一八〇八年の Oeuvres de Turgot 並びに Daire の編纂に係る一八四四年の Oeuvres de Turgot に於ては共に Réponse à une objection なる節は削除せられ、Réflexions の全篇百節より成れることを知るなり。この故に Ashley 及 Dupont de Nemours 並びに Daire の編輯したる Oeuvres de Turgot 中の Réflexions が全然 Ephémérides のとむを直ちに移したるものなる後には明らかか何等の根據なき錯覺として Ashley 自身の言々のものが却て “Strangest of all” といふべきならん。

吾人が Réflexions の邦譯を企てるに當りて底本として座右に置けるものは、既述の如く Robineau の版並びに Ashley の英譯本なるが果して Robineau の版が Turgot の一七七六年に訂正せられたるもの “text exact” なるを否や

る勞働はすべて有用な勞働である。有用なる勞働たるには少くも勞働において希望がなければならぬ。即ち第一の希望は休息の希望である。勞働が如何に快樂であるとしても、すべての勞働にはある程度の苦痛が伴ふ。さうしてこの苦痛を醫し、且つ苦痛を胃して勞働を遂行せしめるものは休息の希望である。休息時において充分なる享樂を行ふ前提の下においてのみ勞働が激洩たることを得る。休息時は、苦痛を回復し、勞働の生産物によつて充分なる快樂を得る程度において長いものでなければならぬ。第二には生産物に對する希望が存在しなければならぬ。吾々の勞働は眞に自然の要求ではあるが、尙ほ且つ生産物が眞の生産たることを要する。吾々の生産するものは眞に吾々の要求するものでなければならぬ。もしかゝる種類の生産を吾々が行つてゐるとしたならば、吾々の能率は